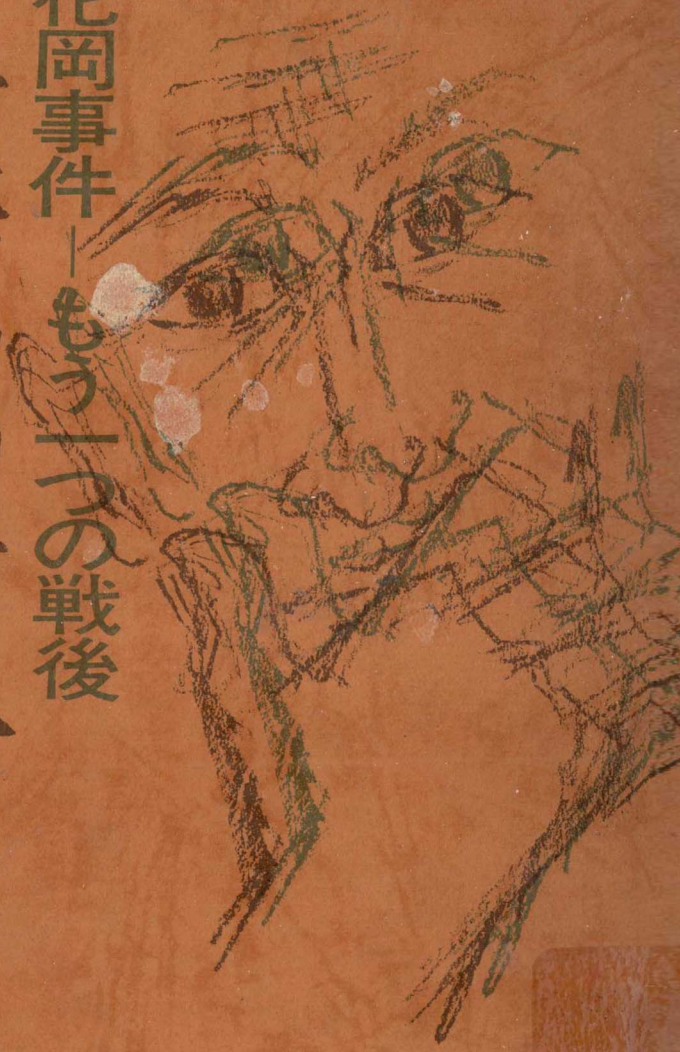
異境の虹

花岡事件―もう一つの戦後



舟田次郎

たいまつ社

境の虹

花岡事件—もう一つの戦後

次郎

たいまつ社

著者紹介

舟田次郎（ふなだ・じろう）

1932年生れ。新聞記者。

現住所・神奈川県相模原市桜台

19—1—104

■異境の虹■著者・舟田次郎■一九七六年六月一〇日初版第一刷二千部発行■定価一五〇〇円■発行所・株式会社たいまつ社・東京都新宿区百人町一—二三—一四・電話〇三—三七一—一五九〇・振替・東京四—二四三六二■発行者・大野進■印刷・株式会社厚徳社

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

出版社コード・4434

目次

異境の虹　花岡事件——もう一つの戦後

花岡事件とは何か　4

I　暗い回路……9

一　電車の中で　10
二　爆弾と平和賞　25
三　慰霊祭の招待　36

II　時間のない四季……53

一　札幌の『北京飯店』　54
二　青島から　75
三　藤の沢の回想　94
四　握手——なにゆえの　115

III　悲歌ふたたび……129

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

一　復交の夜　130
二　冬の波　144
三　銀貨といものの鍬　157
四　イタンキ浜の幽霊　169
五　難破者は二度死んだ　189
Ⅳ　変わらざる日本……205
あとがき　229

装幀　井上宏

花岡事件とは何か

岩波の『近代日本総合年表』によると「一九四五年六月三十日、秋田県花岡鉱山で強制労働中の連行中国人八五〇人が蜂起、収容所を脱走、出動の軍隊と数日間戦闘、四二〇人虐殺される」とある。四二〇人虐殺とあるのは花岡での強制労働全期間の死者の概数、また〝数日間戦闘〟というよりは一方的「鎮圧」に近い状態で全員捕縛までに約一週間かかったというのが真相に近いが、日本人使役者（企業）の圧制に耐えかねた中国人たちが組織的に抵し失敗、その過程でまた苛酷な虐待にあい、多数の死者を出したというのが基本的事実である。強制連行中国人の反抗で日本人側にも死者四人（現場監督）を出したこの事件の背景は、暴動発生までに全連行者の約一四％、約一年を経過した第一次連行組（花岡には一九四四年七月から一九四五年六月まで三回に分けて強制連行されている）の場合は三〇％近い死亡を出した〝使い殺し〟の労働にあり、戦後、極東裁判の中で取り上げられた唯一の中国人関係のケースと

なった。

第二次大戦中、日本国内の労働力不足を補うため中国大陸から強制連行した中国民衆の数は四万人近く（岩波年表では三万八九三九人、うち死亡六八七二人）というが、暴動の舞台となった花岡の鹿島組出張所には一千人弱が配置され、死亡率の高さで全国ワースト5に入った。

国内のジェノサイドともいえるこの中国人強制連行は政府が計画し、民間の企業と個人が実行した「大日本帝国」一体の他民族に対する迫害だったが、加害者、被害者ともまだ生存者は多く、一九七〇年代なかばの現在とも地続きのきわめて〝近い過去〟の中で起きた出来事である。

著　者

異境の虹

花岡事件——もう一つの戦後

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

I 暗い回路

「中国人民は、日本人民に対しては友好感情を持っている。過去も現在もそうであるし、将来もまた変わらないであろう。しかしわれわれは、日本政府が中国人民に対し敵視を続け、劉連仁事件と侵略戦争期間に日本に強制連行された中国人民について、責任をもって説明しないことを決して容認することはできない」

（一九五八年四月十七日付「人民日報」社説）

一、電車の中で

私鉄S駅はサッカー場である。いや、巨大なうそ発見器かもしれない。善良でおとなしい通勤者の群れを、毎夕、一瞬にして果敢なサッカー選手に変身させる。

勤め帰りがラッシュのピークとかち合うたび、つくづくそう思う。けれども、終点折り返しの急行ホームの客は、みんな乗車時間がやたら長いのである。途中、二駅か三駅で下車する人はよくよく少ない。最初に席が取れなかったら、まずずっと立ちんぼだ。一人一人が乗車時に見せる驚くような瞬発力は、日常性の水面下によどむ現代人のエゴと攻撃性をむき出しにした光景に違いなかったけれども、毎日のエネルギーを節約、先に食い延ばすための必要最低限の防衛措置のようでもあった。肥大し膨張し、通勤距離も延び切った首都圏のありようがいけないのだと、そんなふうにも考えてみる。

その夜も、サッカー場は例外でなかった。電車が着いて人々が乗り込んだばかりというのに、もう次の到着待ちの列が長々とできて、試合前の静かでなに食わぬ殺気をジリジリ立ち上らせていた。

一度枯れた生け垣のキョウチクトウがまた赤い花をつけた、異常に暑い九月の中旬だった。発車待ちの先発急行は、すでに満員すし詰めである。冷房はない。天井で扇風機がビュービューうなっては

いるが、髪を乱してうるさいだけだ。むし暑さで、毛穴から疲労がジワジワ泌み込む。乗客はおおむね不機嫌であった。勤め帰りの陽気な解放感は感じられず、けだるい沈黙が車内の時間を支配している。

だが、その中で一ヵ所だけ、バカ陽気なグループがいた。バカ陽気もけたがはずれている。やっと発車した車内は、膝と膝がかち合い、新聞も広げられない混雑というのに、その中でだみ声をはり上げ、軍歌を合唱しているのだ。沿線に学園の多いこの私鉄車内では、ひところ右翼色の強い私大生の小暴力や傍若無人な振舞いが目に余る状態になったことがあったが、いまだみ声をはり上げているのは学生でもマチのあんちゃんでもなかった。不ぞろいで調子っぱずれの「徐州徐州……」はすぐに「同期の桜」に変わり、かと思うと「雪の進軍」まで逆戻りしていつ終わるともなく続く。私がぶら下がっている吊り皮の反対側の座席から、勇ましくも雄々しい中年、というより老年に近いその蛮声は響き渡ってくる。

背伸びして振り返ってみると、車両の振動で時々すき間があく人と人との間から、分別ざかりの五十男が三、四人、向こう側の座席にすわっているのが見えた。かなり聞こし召した赤黒い顔で乗客の視線も迷惑顔もものかわ、目を閉じたりあいたり、気持よさそうに合唱、というよりわめき散らしている。

歌の合い間の話のやり取りも、これまた数を頼む暴走族の調子だ。見たところ、通勤サラリーマンではないが地方から上京して来た遠来組の感じでもない。さしづめ、沿線の奥の方の町の商店経営者か農協の役員といった風体で、何かの同窓会か同期会で一杯やってメートルを上げてきた帰りというところらしかった。

「きょう集まった連中もよォ、いまじゃいっぱしの管理職づらしてるのが多いけどよォ、まかり間違ってたら終戦ンときいのちがなかった連中ばっかりだよなァ。向こうじゃさんざ、いい思いして、ひどいことやってきたやつらばかりだからなァ」

「おれだってお前だっておんなじジャン。いまこうしていられるのは、なんつったって蔣介石のおかげだ。おれァアメリカも毛沢東も大嫌いだけどよ、蔣介石だけは好きなんだ。報怨以徳。知ってるだろう。蔣介石のアレがなかったらヨ、おれたち生きては帰れなかったジャンか。ほんとだよ。だからおれ、いつも女房にも子供にもいってるんだ、蔣介石さまさまだってよ。それに比べたらよ、中共なんてのは……」

「バンダの桜か襟の色、オーレッ」

また軍歌、そして今度は声高なワイ談。週刊誌のポルノ小説そこのけの直接描写にまじって「共産党のやつらな、あいつらみんな練兵場みたいなとこに集めて、ぶった斬っちまう方がいい」とかのモーレツぶり。よくよく昔の日本がなつかしいらしい。前に女性がいようが子供がいようがお構いなしである。

乗客はかれらを無視しているが、かれらも乗客を無視し切っている。途中から乗って来た客は、最初「なんだ、なんだ」というふうに目を向けるが、すぐに知らん顔をしてしまう。年がいもなく、たまさかの戦友会かなんかで引っかけた酒で気が大きくなったかれらの方も、それを見越して傍若無人をきめ込んでいる。発車からもう四十分間、よく飽きないものだ。見ていると、ドア際の座席を占領したやせて目のギラギラした、いくらか若く見える男が一番勇ましい。高い声で切れ目もなく、しゃべりまくり、いうことも抜群にあくどくて支配者然としている。毛のすり切れたキツネのようなこの

男に引きずられて、他の連中は歌ったりわめいたりしているあんばいなのだ。
乗り換え駅が近くなって車内はいくらかすいてきた。かれらが下りるかどうかはわからない。私はドアの近くに移動してキツネ男のすぐわきに立った。私も、無関心を最良の美徳とする平均的サラリーマンの一人である。傍若無人な悪ふざけを長々聞かされて不愉快になってはいても、正体不明なこの連中に声をかけてたしなめようなどさらさら思っていなかった。第一、よくあるように、下手に声をかけて刃物でブスリなんてのはごめんである。クールに黙殺している他の乗客から変人扱いされるのもシャクの種だ。だが、キツネ男がまたカン高い声を張り上げたとき、あろうことか、私の右手は自然に動いてしまった。持っていた夕刊の束で、男の肩をピシャリとやってしまったのである。瞬間、男は眼鏡の奥の細い目で私の顔をうかがい、明らかに追従笑いを浮かべた。
アウトローの本質からはまるで程遠い—相手次第で暴君にも下僕にもなる卑屈な性根をさらけ出した笑いだった。私はつとめて冷静をよそおい、無理に胸を張った。
ところが、である。私はどう見てもあまり強そうには見えないらしいのだ。背だって高くはないし、体重は五十三キロちょっとしかない。白のホンコンシャツにありふれたネクタイをぶら下げた典型的な安サラリーマンスタイルだから、なんとか組の幹部だぞといきがって見せるわけにもいかない。一度は追従笑いを浮べたものの、キツネ男は誰はばからぬだみ声をまた張り上げた。私の右手は、またまた反射的に動いてしまった。全くのところ、こと志と違った成り行きになった。
「なにすんだ？」キツネ男は、今度ははっきり私の顔を見据えた。
「なにもしてないよ。電車は混んでるんだ。押されて新聞が当たることだってあるよ」
なんとなく、待ち構えていたような言葉が私の口から出た。酔いの赤みがまだ残っている顔面に細

い目をぎらつかせ、キツネ男はいった。
「暴力はよせ」
「暴力？」私はキョトンとして見せた。
「暴力ハンタイ、平和日本か。なんだい、ここまでずっと歌ったりわめいたりのし続けだったくせに。いいとしをしてラチもねえよ。ああいうのを声の暴力というんだ」
キツネ男の向こうから、河馬のような五十男が顔を出した。
「こいつ、さっきからおれたちの方をじろじろ眺めてたぞ」
「ああ、眺めてたよ。だって珍しいじゃないか。満員電車の中の花見なんてオレ、見たの初めてだ」
「こいつ」キツネ男は、ぶらぶらさせていた私の右手をつかんで引っぱり込み、向こう側から河馬おやじも手をのばして二人がかりで押えつけた。つかんだ手首の細いのがよっぽどうれしかったらしく、
「この細っこいやつ、少しいじめてやろうか。こら、この野郎」
前かがみになった私の顔はキツネ男の顔の真っ正面にいった。さっきは追従笑いを浮べた細い目が心もちニヤニヤして、捕えたえものをなぶって楽しむ残忍な目つきになっている。
「アレッ、この顔……」
ビンの底みたいな丸い眼鏡に細い目、あごのとがったキツネ男の顔はどこかで見たような気がしていたのだが、たぐり寄せられてつんのめった瞬間、私は思い出した。そうだ、あのときのあいつだ。他人の空似かも知れないが感じはそっくりだ……。
つかまれた手はすぐ振り払った。「少しいじめてやろうか」の言葉は、吐いたやつの正体を現わして

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.